

荒神谷青銅器発見40周年 里帰り! 国宝青銅器 —埋納の地へ—

Homecoming! National Treasures Bronze Artifacts Exhibition - Back to Their Resting Place

国宝展ニュース NO.5 (最終号)

〈全体会期:2025.4.9(水)~2026.1.12(月・祝)〉

発行年月日: 2025年11月22日(土)

発行: 荒神谷博物館

長年、島根県下の考古学業務に従事され、荒神谷遺跡の銅剣発掘作業に調査員として参加された故・三宅博士^{みやけひろし}氏は、その著書の中で、荒神谷遺跡について「ある部分が見えたかと思うと、たちまち消えるし、見えた部分が頭か足かもよくはわからない。」と表現し、その謎に満ちた変幻ぶりからか遺跡を大胆にも「怪物」と言い表しています。

青銅器が発見されてから40年。発掘と同時に湧き出てきた多くの謎は、未だ未解明のままとなっています。三宅氏の表現をあえて借りるなら、私達はこの「怪物」の「尾ひれ」すら、もしかすると掴んでいないのかもしれません。

「いつ、だれが、なんのために」という最大の問いに、今後も博物館の使命として挑んで参ります。



展示の様子 銅剣D76、D77、D78
銅鐸5号
銅矛3・4号

(文化庁蔵・島根県古代出雲歴史博物館保管)
[第5期公開期間:11/22(土)~1/12(月・祝)]

学芸員の“推し”! ~“最古”の音色・5号銅鐸~

青銅器の起源は3000年頃、オリエント地方のメソポタミアに始まります。中国では前2000年頃に青銅器の使用が始まり、その後、朝鮮半島においても、青銅器が作られました。

はるか彼方、中東の地で生まれた青銅器の製作技術は、数千年の時を経て大陸を渡り、海を越えて、そして日本へたどり着きます。その中でも銅鐸は日本独自の変化を辿りますが、今回展示する5号銅鐸は、型式上では最古の銅鐸^{りょうかんちゅうしき}(菱環鈕式:銅鐸周囲の^{ひれ}鰭が無く鈕^{ちゆう}(吊り手)の断面が◇形※裏面参照)にあたり、希少なものです。日本列島の人々がおそらく初めて耳にしたであろう、するどい青銅の音を響かせていたのです。



5号銅鐸

荒神谷発掘物語⑤ ~サプライズ! 紅白に出演~

歌は世につれ、世は歌につれ…と云われますが、大晦日^{おおみそか}の「NHK 紅白歌合戦」は、その年のヒットソングを生んだ歌手が出演したり、または、何らかの目立った活躍をした人物が審査員として登壇するなど、まさに世相をよくよく表していると云えます。

1984年、荒神谷遺跡は銅剣の発見により、日本中の話題をさらいました。そのおかげでしょうか、その年の紅白歌合戦に、荒神谷の発掘関係者が、年の瀬にふさわしい存在として、審査員の一人に見事選出されたのでした。

(文:学芸員



どうけん

銅剣

「×」印の刻印



土中で腐食が進んだ銅剣も多いのですが、D76は比較的保存状態が良い。

358本出土したうちの3本で、この3本は隣あって埋納されていました。
荒神谷遺跡の銅剣はすべて「中細形C類」と呼ばれる同一タイプです。

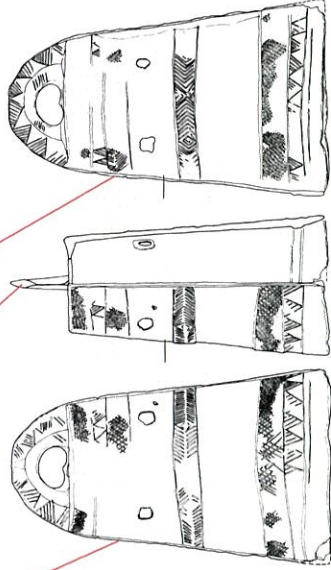
どうたく

銅鐸

鈕（吊り手）の断面が菱形となる古いタイプ

銅鐸の合わせ目にできたバリ

菱唐文・綾杉文・斜格字文を施した横帯で鐸身を区画する。



（展示の裏面）

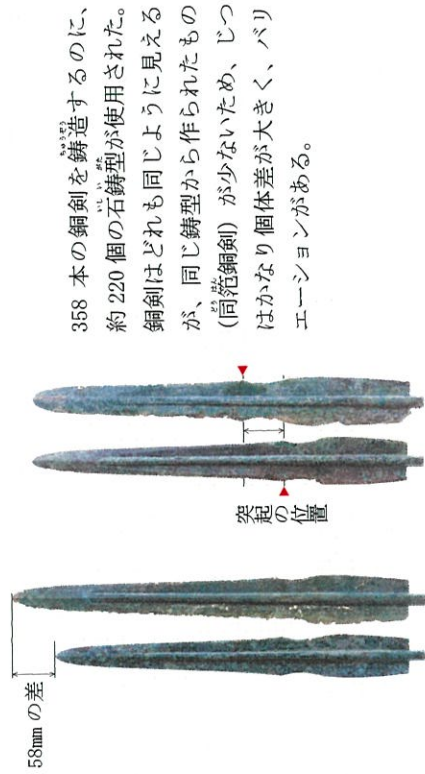
5号銅鐸

6個出土したうちのひとつです。「菱環鈕式」と呼ばれる古いタイプの銅鐸で、明確な「鱗（銅鐸の側面につく飾り）」はまだありません。

どうほこ

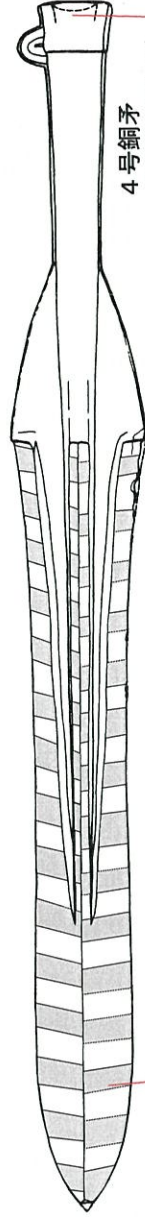
銅矛

16本出土したうちの2本です。4号銅矛は荒神谷遺跡の銅矛のなかで最も大きな部類で、重量が最大の個体です。



358本の銅剣を製造するのに、約220個の石鑄型が使用された。銅剣はどれも同じように見えるが、同じ鑄型から作られたもの（同范銅剣）が少ないため、じつはかなりの個体差が大きく、バリエーションがある。

突起の位置



4号銅矛
(長さ82.3cm, 重さ2.160g)



3号銅矛
(長さ74.9cm, 重さ1.760g)

刃部の研ぎ分け
研磨方向を変えることにより、矢羽根（綾杉）状の文様をつけている。光を反射させると浮き上がる。

袋部の内側には、鑄造時の中子土がそのまま残されている。柄を一度も差さなかったことをものがたる。

長さの違い／プロポーションの違い